



20

15

10

北村門右郎著

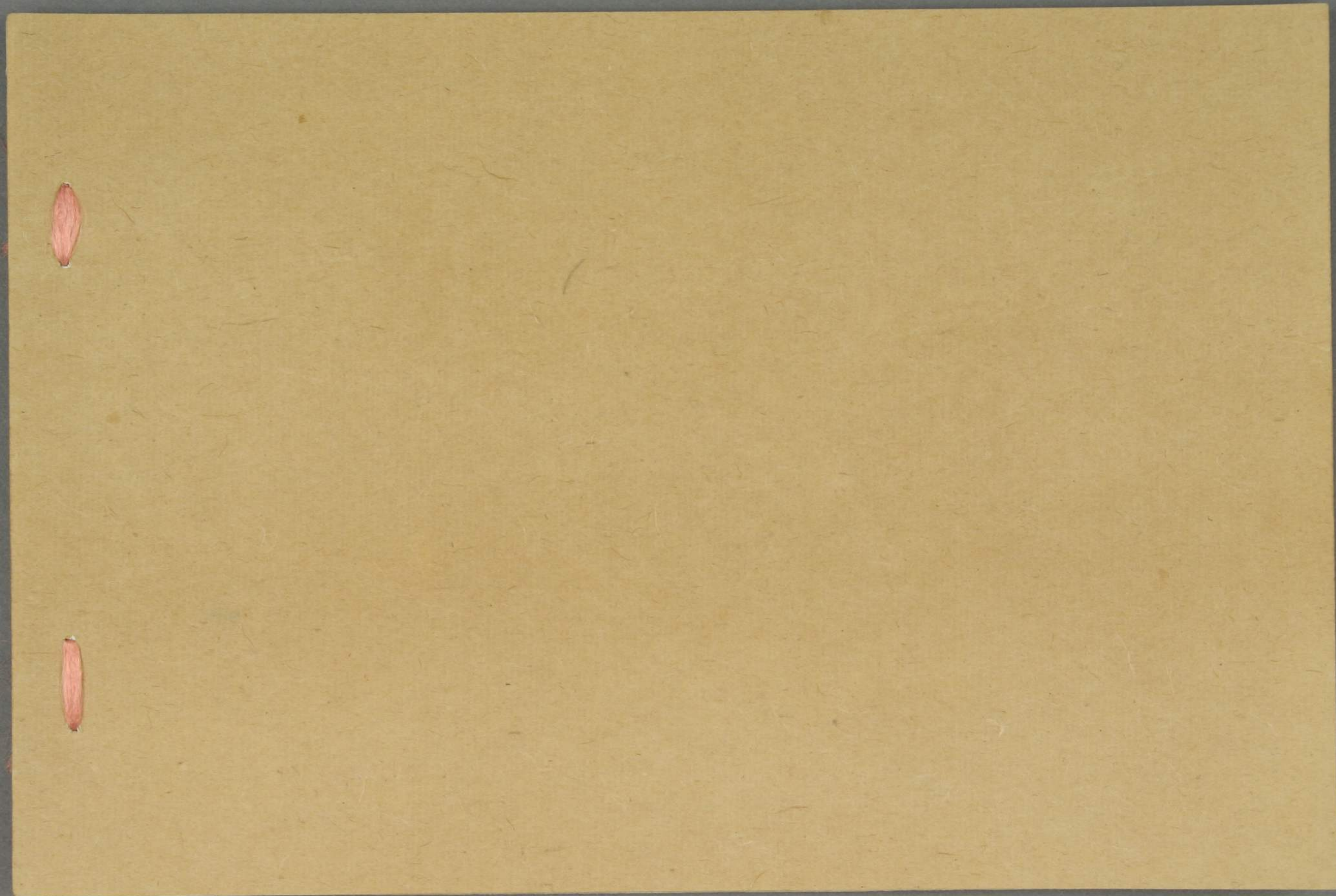
楚囚之詩













自序

余は遂に一詩を作り上げました。大膽にも是れを書肆の手に渡して知己及び文學に志ある江湖の諸兄に頼たんとまでは決心しましたが、實の處躊躇しました。余は實は多年斯の如き者を作らんと心に心を寄せて居ました。が然し、如何にも非常の改革、至大艱難の事業をれば今日までは黙過して居たのです。

或時は翻譯して見たり、又た或時は自作して見たり、いろいろに試みますが、底事此の篇位の者です。然るに近頃文學社界は新体詩とか變体詩とかの議論が囂しく起りまして、勇氣ある文學家は手に唾して此大革命をやつてのげんと奮發され數多の小詩歌が各種の紙上に出現するに至りました。是れが余を激勵したのです、是れが余をして文學世界に歩み近よらしめた者です。

余は此「楚囚の詩」が江湖に容れられる事を要しませぬ然し、余は確かに信ず、吾等の同志が諸



共に協力して素志を貫く心にあれば遂には狹隘ある古來の詩歌を進歩せしめて、今日行はるゝ小説の如くに且つ最も優美ある靈妙ある者とあらずに難からずと。

幸にして余は尙ほ年少の身あれば、好し此楚囚の詩が諸君の嗤笑を買ひ、諸君の心頭を傷くる事あらんとも、尙ほ余は他日は是れが罪を償ひ得る事ある可しと思ひます。

元とより是は吾國語の所謂歌でも詩でもありませぬ、寧ろ小説に似て居るのです。左れど、是れでも詩です、余は此様にして三の詩を作り始めませふ。又た此篇の楚珍は今日の時代に意を寓したものでありませぬから獄舎の模様あども必らず違つて居ます。唯だ獄中にありての感情、境遇あどもは聊か心を用ひた處です。

透谷橋外の橋寓に於いて

明治廿二年  
四月六日

北村門太郎謹識

### 楚囚之詩。

北村門太郎著

#### 第一

曾つて誤つて法を破り

政治の罪人として捕へられたり、

余と生死を誓ひし壯士等の

數多あるうちに余は其首領あり、

中に、余が最愛の

まだ蕾の花ある少女も、

國の爲とて諸共に

この花婿も花嫁も。

#### 第二

余が髪は何時の間にか伸びていと長し、  
前額を蓋ひ眼を遮りていと重し、  
肉は落ち骨出で胸は常に枯れ、  
沈み、萎れ、縮み、あゝ、物憂し、



歲月を重ねし故にあらず、  
又た疾病に苦む爲あらず、  
浦島が歸郷の其れにも  
はて似付かふもあらず、

余が口は枯れたり、余が眼は凹し、

曾つて世を動かす辨論をさせし此口も、  
曾つて萬古を通貫したるこの活眼も、

はや今ハ口ハ腐れたる空氣を呼吸し

眼は限られたる暗き壁を睥睨し

且つ我腕ハ曲り、足は撓ゆめり、

嗚呼楚囚！世の大陽ハいと遠し！

噫此ハ何の科テヤ？

たゞ國の前途を計りてあり！

噫此ハ何の結果テヤ？

此世の民に盡したればあり！

去れど獨り余あらず、

吾が祖父は骨を戦野に暴せり、  
吾が父も國の爲めに生命を捨たり、

余が代には楚囚とありて、  
とこしあへに母に離るあり。

第三

獄舎！ つたあくも余が迷入れる獄舎は、  
二重の壁にて世界と隔たれり

左れど其壁の隙又た穴をもぐりて

逃場を失ひ、馳込む日光もあり、

余の青醒めたる腕を照さんとして

壁を傳ひ、余が膝の上まで歩寄れり。

余は心あく頭を擡げて見れば、

この獄舎は廣く且空しくして、

中に四つのしきりが境とあり、

四人の罪人が打揃ひて――

曾つて生死を誓ひし壯士等が、

無残や狭まき籠に繋れて！

彼等は山頂の鷲ありき、



自由に喬木の上を舞ひ、  
 又た不羈に清朝の天を旅し、  
 ひとたびは山野に威を振ひ、  
 慄悍ある熊をわろれしめ、  
 湖上の毒蛇の巢を襲ひ  
 世に畏れられたる者なるま  
 今は此籠中に憂き棲ひ！  
 四人は一室にありながら  
 物語りずる事は許されず、  
 四人は同じ思ひを持ちながら  
 そを運ふ事さへ容されず、  
 各自限られたる場所の外へは  
 足を踏み出す事かあわず、  
 たゞ相通ふ者とては  
 全じ心のためいきあり。

## 第四

四人の中にも、美しくしき  
 我花嫁……いと若かき  
 其の頬の色は消失せて  
 顔色の別けて悲しき！  
 嗚呼余の胸を撃つ  
 其の物思わしき眼付き！

彼は余と故郷を全じふし、  
 余と手を携へて都へ上りにき——  
 京都に出で、琵琶を後にし  
 三州の沃野を過りて、濱名に着き、  
 富士の麓に出で、函根を越し、  
 遂に花の都へは着たりき、  
 愛といひ戀といふには科あれど、  
 吾等雙個の愛は精神にあり、  
 花の美しくしきは美しくしけれど、  
 吾が花嫁の美は、其蕊にあり、  
 梅が枝にさへする鳥は多情あれ、  
 吾が情はたゞ赤き心にあり、



彼れの柔き手は吾が肩にありて、  
余は幾度か神に祈を捧たり。

去れどつれあくも風は妬まれて、  
愛も望みも花も萎れてけり。

一夜の契りも結ばずして  
花婿と花嫁は獄舎にあり。

獄舎は狭し  
狭き中にも両世界

彼方の世界に余の半身あり、  
此方の世界に余の半身あり、  
彼方が宿か此方が宿か？

余の魂は日夜獨り迷ふあり！

第五

あとの三個は少年の壯士あり、  
或は東奥、或は中國より出てぬ、  
彼等は壯士の中にも余が愛する

眞に勇豪ある少年にてありぬ、  
去れど見よ彼等の腕の縛らるゝを！

流石に怒れる色もあらはれぬ  
怒れる色！ 何を怒りてか？

自由の神は世に居まさぬ！  
兎は言へ、猶ほ彼等の魂は縛られず、

稗落に遠近の山川に舞ひつらん、  
彼の富士山の頂に汝の魂は留りて、  
雲に駕し月に戯れてありつらん、

嗚呼何ぞ穢あき此の獄舎の中に、  
汝の清浄ある魂が暫時も居らん！

斯く云ふ我が魂も獄中にはあらずして  
日々夜々、輕るく獄窓を逃伸びつ

余が愛する少女の魂も跡を追ひ  
諸共に、昔の花園に舞ひ行きつ

塵あく汚あき地の上にはふバイラレット  
其名もゆかしきフオゲッドミイナッド

其他種々の花を優しく摘みつ



ひとふさは我胸にさしかざし

他のひとふさは我が愛に與へつ

ホッ！ 是は夢ある！

見よ！ 我花嫁は此方に向くよ！

其の痛ましき姿！

嗚呼爰は獄舎

此世の地獄ある。

### 第六

世界の太陽と獄舎の太陽とは物異れり

此中には日と夜の差別の薄かりき、

何せ……余は晝眠る事を慣として

夜の静まる時を覺め居たりき。

ひと夜。余は暫時の坐睡を貪りて

起き上り、厭わしき眼を強いて開き

見廻せば暗さは常の如く暗けれど、

あほさし入るおぼろの光……是れは月！

月と認れば余が胸に絶へぬ思ひの種、

借に問ふ、今日の月は昨日の月ありや？

然り！ 踏めども消せども消へぬ明光の月、

嗚呼少かりし時、曾つて富嶽に攀上り、

近かく、其頂上に相見たる美しくしの月

美の女王！ 曾つて又た隅田に舸を投げ、

花の懐にも汝とは契をこめたりき。

全じ月をらん！ 去れど余には見へず、

全じ光をらん！ 去れど余には來らず、

呼べど招けど、もふ

汝は吾が友をらす。

### 第七

半番は疲れて快く眠り、

腰ある秋水のいと重し。

意中の人知らず余の醒たるを……

眠の極樂……尙ほ彼はいと快し



嗚呼二枚の毛氈の寢床にも  
 此の神女の眠りはいと安し！  
 余は幾度も軽るく足を踏み、  
 愛人の眠りを攪さんとせし、  
 左れど眠の中に愛のなきものを、  
 覺させて、其を再び招かせじ。  
 眼を鐵窓の方に回へし  
 余は來るともなく窓下に來れり  
 逃路を得んが爲をらず  
 唯だ足に任せて來りしあり  
 もれ入る月のひかり  
 ても其姿の懐かしき！

第八

想ひは奔る、往きし昔は日々に新あり  
 彼山、彼水、彼庭、彼花に余が心は殘れり、  
 彼の花！余と余が母と余が花嫁と

もろともに植へにし花にも別れてけり、  
 思へば、余は暇を告ぐる隙もあかりしあり。  
 誰れに氣兼するにもあらねど、ひうひう  
 余は獄窓の元に身を寄せてぞ  
 何にもあれ世界の音信のあれかしと  
 待つに甲斐あり！ 是は何物ぞ？  
 送り來れるゆかしき菊の香！  
 余は思わずも鼻を聳へたり。  
 こは我家の庭の菊の我を忘れで、  
 遠く西の國まで余を見舞ふあり。  
 あゝ、我を思ふ友！  
 恨むらくはこの香  
 我手には觸れぬあり。

第九

またひとあさ余は晩く醒め、  
 高く壁を傳ひてはひ登る日の光



余は吾花嫁の方に先づ眼を送れば、

こは如何に！ 影もなき吾が花嫁！

思ふに彼は他の獄舎に送られけん、

余が睡眠の中に移されたりけん、

とはあわれむ！ 一目ありと一せきありと、

(何ぞ、言葉を交わす事は許されざれば)

永別の印をかかず事もかあわざりけん！

三個の壯士もみる影を留めぬあり、

ひとり此廣間に余を残したり、

朝寝の中に見たる夢の偽ありき、

噫偽りの夢！ 皆な往けり！

往けり、我愛も！

また同盟の眞友も！

第十

倦み來りて、記憶も歲月も皆を去りぬ、

寒くあり暖くあり、春、秋、と過ぎぬ、

暗さ物憂さにも余は感情を失ひて

今は唯だ膝を組む事のみ知りぬ

罪も望も、世界も星辰も皆盡きて、

余にはあらゆる者皆、……無に歸して

たゞ寂寥、……微かある呼吸

生死の間の響ある

甘き愛の花嫁も、身を抛ちし國事も

忘れては、もふ夢とも又た現とも！

嗚呼數歩を運べばすちわち壁、

三回まわれれば疲る、流石に余が足も！

第十一

余には日と夜との區別ありし、

去れど余の倦たる耳にも聞きし、

曉の鶏や、また聒に急く鳥の聲、

兎は言へ其形……想像の外には曾つて見ざりし、

ひと宵余は早くより木の枕を



窓下に推し當て、眠りの神を  
 祈れども、まだこの疲れたる脳は安らず、  
 半分眠り——且つ死し、亦は半分は  
 生きてあり、——とは願はぬものを。  
 突如窓を叩いて余が靈を呼ぶ者あり  
 あやにくに余は過にし花嫁を思出たり、  
 弱き腰を引立て、窓に飛上らんと企てしに、  
 こは如何に！ 何者……余が顔を撃たり！  
 計らざりき、幾年月の久しきに、  
 始めて世界の生物が見舞ひ來れり。  
 彼は獄舎の中を狭しと思はず、  
 梁の上梁の下俯仰自由に羽を伸ばす、  
 能き友ありや、こは大陽に嫌はれし蝙蝠、  
 我無聊を訪來れり、獄舎の中を厭はず、  
 想ひ見る！ 此は我花嫁の化身ならずや  
 嗚呼約せし事望みし事は遂に來らず、  
 忌わしき形を假りて、我を慕ひ來るとは！  
 ても可憐奇！ 余は蝙蝠を去らしめず。

## 第十二

余には穢なき衣類のみあるれば、  
 是を脱ぎ、蝙蝠に投げ與るれば、  
 彼は喜びて衣類と共に床に落たり、  
 余はい寄りて是を抑ゆれば、  
 蝙蝠は泣けり、サモ悲しき聲にて、  
 何ぞあれば、彼は亦は自由を持つ身あれば、  
 恐るゝ奇！ 捕ふる人は自由を失ひたれ、  
 卿を捕ふるに……野心は絶へて無ければ。

嗚呼！ 是は一の蝙蝠！

余が花嫁は斯る悪くき顔にては！  
 左れど余は彼を逃げ去らしめず、  
 何ぞ……此生物は余が友とあり得れば、  
 好し……暫時獄中に留め置かんに、  
 左れど如何にせん？ 彼を留め置くには？  
 吾に力をきか、此一獸を留置くにさへ？





次きの畫は甚しき失策で  
ありました、是れでも著  
名なる畫家と熱心なる彫  
刻師との手に成りたる者  
です。野邊の夕景色と  
しか見へませぬが、獄舎  
の中と見て下さらねば困  
ります。

傷ましや！ あほ自由あり、此獄けのには。  
余は彼を放ちやれり、  
自由の獸……彼は喜んで、  
疾く獄窓を逃げ出たり。



第十三

恨むらくは昔の記憶の消へざるを、  
若き昔時……其の樂しき故郷！

暗らき中にも、回想の眼はいと明るく、

畫と見へて畫にはあらぬ我が故郷！

雪を戴きし冬の山、霞をこめし溪の水、

よも變らじ其美しくしさは、昨日と今日、

我身獨りの行末が……如何に

浮世と共に變り果てんとも！

嗚呼蒼天！ 亦ほ其處に鷺は舞ふや？

嗚呼深淵！ 亦ほ其處に魚は躍るや？

春？ 秋？ 花？ 月？

是等の物がまだ存るや？

曾つて我が愛と共に逍遙せし、

樂しき野山の影は如何にせし？

摘みし野花？ 聽きし溪の樂器？

あゝ是等は余の最も親愛せる友ありし！

有る——無し——の答は無用あり、

常に余が想像には現然たり、

羽あらば歸りたし、も一度、

貧しく平和ある昔のいほり。

第十四

冬は 嚴しく余を惱殺す、

壁を穿つ日光も暖を送らず、

日は短し！して夜はいと長し！

寒さ臉を凍らせて眠りも成らず。

然れども、いつかは春の歸り來らん、

好し、顧みる物はあしども、破運の余に、

たい何心をく春は待ちわぶる思ひする、

余は獄舎の中より春を招きたり、高き天に。

遂に余は春の來るを告られたり、

鶯に！ 鐵窓の外に鳴く鶯に！



知らず、ろくに如何ある樹があるや？  
梅か？ 梅あらば、香の風に送らる可きに。

美しい聲！ やよ鶯よ！

余は飛び起きて、

僅に鐵窓に攀ぢ上るに

鶯は此響には驚ろかで、

獄舎の軒にとまれり、いと靜に！

余は再び疑ひうめたり……此鳥ころは

眞に、愛する妻の化身あらんに。

鶯は余が幽靈の姿を振り向きて

飛び去らんとはあさずして

再び歌ひ出でたる聲のすゞしき！

余が幾年月の鬱を拂ひて。

卿の美しくしき衣は神の恵みある、

卿の美しくしき調子も神の恵みある、

卿がこの獄舎に足を留めるのも

また神の……是は余に與ふる恵ある、

然り！ 神は鶯を送りて、

余が不幸を慰むる厚き心ある！

嗚呼夢に似てあは夢ならぬ、

余が身にも……神の心は及ぶある。

思ひ出す……我妻は此世に存るや否？

彼れ若し逝きたらんには其化身あり、

我愛はあは全しく獄裡に呻吟ふや？

若し然らば此鳥ころ彼れが靈の化身あり。

自由、高尚、美妙ある彼れの精靈が

この美しくしき鳥に化せるはことわりあり、

斯くして、再び余が憂鬱を訪ひ来る——

誠の愛の友！ 余の眼に涙は充ちてけり。

第十五

鶯は再び歌ひ出でたり、

余は其の歌の意を解き得るあり、

百種の言葉を聞き取れば、

皆余を慰むる愛の言葉あり！



浮世よりか、將た天國より來りしかか？  
余には神の使とのみ見ゆるなり。  
嗚呼去りながら―其の練れたる態度  
恰かも籠の中より逃れ來れりとも――

若し然らば……余が同情を憐みて  
來りしか、余が伴たらんと思ひて？

鳥の愛！世に捨てられし此身にも！  
鶯よ！卿は籠を出でたれど、

余は死に至るまでは許されじ  
余を泣かしめ、又た笑ましむれど、

卿の歌は、余の不幸を救ひ得じ。  
我が花嫁よ……否を鶯よ！

かゝ悲しや、彼は逃げ去れり  
嗚呼是れも亦た浮世の動物あり。

若し我妻をらば、何ぞ逃去らん  
余を再び此寂寥に打ち捨て、  
この慘憺たる墓所に残して

暗らき、空しき墓所――

其處には腐れたる空氣、  
濕りたる床のいと冷たき、  
余は爰を墓所と定めたり、  
生ながら既に葬られたればあり。  
死、汝何時來る？  
永く待たずあよ、待つ人を、  
余は汝に犯せる罪のなき者を！

第十六

鶯は余を捨て、去り  
余は更に快鬱に沈みたり、  
春は都よ如何あるや？  
確かに、都は今が花あり！  
斯く余が想像中央に  
久し振よて獄吏は入り來れり。  
遂よ余は放され、  
大赦の大慈を感謝せり。



門を出れば、多くの朋友、  
 集ひ、余を迎へ來れり、  
 中にも余が最愛の花嫁は、  
 走り來りて余の手を握りたり、  
 彼れが眼も余が眼にも全じ涙——  
 又た多數の朋友は喜んで踏舞せり、  
 先きの可愛ゆき鶯も爰に來りて  
 再び美妙の調べを、衆に聞かせたり。

明治廿二年四月七日印刷  
 全 年四月九日出版



著者

神奈川縣士族

北村門太郎

東京々橋區彌左衛門町七番地

發行兼印刷者

神奈川縣士族

近藤音次郎

東京々橋區銀座四丁目十二番地

印刷者

濱田傳三郎

東京芝區琴平町二番地

發行所

春祥堂

東京々橋區銀座四丁目十二番地

10631



